

## 春岡村の伝説

### 春岡村のこどもの情景

《大さむ 小さむ》  
大さむ 小さむ 山から小僧が泣いてきた  
何だといって泣いてきた 寒いといって泣いてきた  
寒けりゃあたれ あたれば熱いや  
熱けりゃあとされ あとさればけつ痛い  
けつ痛けりゃ布団すけ 布団すけばのみがくう  
のみがくえば食いつぶせ くつつぶせば苦いやー  
苦けりゃ水飲め 水飲めば腹痛てー  
腹痛てけりゃ薬飲め 薬飲めば治っちゃう

これはさいたま市桜区の久保領家で昭和30年代に聞き書きされたものです。秩父おろしの寒い日、こどもたちはほおを真っ赤にし、鼻水をたらしながら、大きな声で歌っていたのでしょうか。

夏の夕方や秋の農繁期、こどもたちは子守りをし、外で遊ぶように言われます。近所の辻や小さな祠などの空き地に自然とこどもが集まります。そんなときの遊びに春岡ではこんな遊びがありました。

《中の中のコン坊主》(子) 中の中のコン坊主 なぜ背が小さいんだ  
(鬼) 一杯のメシ三度に食うから それから背が小さいんだ  
(子) ザッコザングルまいて えびしゃがめ

一人が鬼になり、目をふさいで中に座ります。ほかのこどもたちは、手をつないでその周りをぐるぐる回りながら、鬼と周りの子どもが問答的にこの唄を歌います。唄が終わると、つないでいた手を一斉に解いて、それぞれが行きついたところで止まってしゃがみます。中のコン坊主は、目をつむったまま捕まえた者の頭や顔をなでまわし、名を言い当てるといふ遊びです。

《坊さんどこへいく》(子) 坊さん 坊さん どこいくのー  
(鬼) わたしゃ田んぼへ 稲刈りに  
(子) わたしも一緒に いきましょう  
(鬼) おまえが行くてと 邪魔になるー  
(子) このカンカン坊主 糞坊主  
(鬼) うしろの正面 だあれ

歌い終わると一斉にしゃがみ、鬼は自分の後ろにいる者の名を言い当てるといふもの。

これらの童謡を聞き書きした『思い出の春岡』の筆者 銭場佐一郎氏（明治34年生まれ）は、「農繁期、こどもたちは家庭的には一種の虐待を受けることになるが、一面玲瓏たる月光を受けて唄い出す心境は、まったく夢の世界で、憧れの境地ではある」と書いています。おそらく昭和30年代まであった春岡の風景ですが、この時代に明治生まれの人が虐待という表現をしているのはおどろきです。

（東三番街 平山由喜）



（昭和40年ごろ）